P-10

キルギス語における補助動詞構造 *-(I)p jat-* [-CVB.SEQ lie-] の文法化形式 *-bat* について

日髙　晋介
(筑波大学)

【要旨】キルギス語 (チュルク諸語北西語群) における *V-(I)p jat-*は、先行研究では動作の継続や進行を表すとされているが、縮約形式 *-bat* は十分に記述されてこなかった。本発表では、音韻論的観点から *-bat* には母音調和と円唇調和が起こらないこと、形態論的観点から *-bat* 自体が音的に単独で現れずに屈折接辞を付せること、意味論的観点から *-bat* がいかなる語彙的意味も表さないことを明らかにした。この調査結果をもとに、文法化の観点からも記述を行った。*-bat* は文法化がさらに進んだ形式と言えるが、*-bat* が語・接語・接尾辞のいずれなのかが不明であるため、文法性のクライン (漸次変容) における *-bat* の位置付けも不明である。発表者は、*-bat* を含んだ語が一つのアクセントを保つ点と、動詞語根直後にアスペクト接尾辞が付されうる点から、*-bat* を接尾辞であるとみなす。さらに、キルギスとの隣接地域で話される言語にも、同様のアスペクト形式が存在することから、この形式が地域特徴である可能性についても指摘する。

1.　はじめに

キルギス語 (チュルク諸語北西語群) では、継起副動詞 *V* (erb stem)-*(I)p* に *jat-*「横たわる」が続くことで、継起副動詞の語幹が表す動作の進行あるいは持続・習慣が表される (Wurm 1949: 119, Zaxarova 1987: 279)。Zaxarova (1987: 280) は、補助動詞構造が一つのアクセントを持ち、*V-(I) jat-* の *jat-* の頭音が落ち主動詞と融合する例を挙げているが、補助動詞を扱った研究 (アクマタリエワ 2014、スバゴジョエワ 2016 など) では、これについて言及していない。発表者のこれまでの調査によれば、*ište-**bat**-a-t* [iʃteβatát] と一つの強勢を取って縮約して一語として発音される例が観察されている。本発表では、*-bat* について音韻論的・形態論的・意味論的観点から記述し、さらに文法化の観点からも記述し、このようそが語・接語・接尾辞のどれに当たるのかについて議論する。また、中央アジアで話されるが別語群に属する、現代ウイグル語とウズベク語タシケント方言 (ともに南東語群) にも、キルギス語の *bat-* と同様に、継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式が存在することが指摘されている (Johanson 2021: 647)。これらの形式を概観することで、キルギス語・現代ウイグル語・ウズベク語タシケント方言の継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式が地域特徴である可能性があることを指摘する。

本発表では、*-bat* を音韻論・形態論・意味論、さらに文法化の観点から記述する。特に文法化の観点から記述する際に、文法化のクライン (内容項目 > 文法的な語 > 接語 > 屈折接辞; Hopper and Traugott 2003: 7) において、語とも接語とも接辞とも判断できないことを示す。最終的に、音韻的観点 (*-bat* を含んだ一語が一つのアクセントを保つ点) と形態論的観点 (キルギス語の動詞形態法において動詞語根の直後にアスペクト接辞が付されうる点) から、*-bat* は接辞であると結論付ける。

本発表の構成は次のとおりである。2 節で先行研究について述べ、3 節で調査について述べ、調査結果を音韻論・形態論・意味論的な観点からそれぞれ記述する。4 節では前節の調査結果をもとに、文法化の観点から記述を行う。さらに、5 節では、ウズベク語と現代ウイグル語における継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式についても議論を行う。なお、本発表における例文・日本語訳・グロス・例文中の装飾 (太字、下線) は発表者による。

2. 先行研究

キルギス語では、*V-(I)p jat-*[1] で、動作の進行 (1) あるいは持続・習慣 (2) が表される (Wurm 1949: 119, Zaxarova 1987: 279)。

(1) ***oku-p*** ***jat-a-t***
read-CVB.SEQ lie-NPST-3
「彼は (ちょうど今) 読んでいる」
(Wurm 1949: 119)

(2) *Purunza-da* ***ište-p*** ***jat-a-t.***
Frunze-LOC work-CVB.SEQ lie-NPST-3
「彼はフルンゼで (いつも) 働いている」
(Wurm 1949: 119)

上記の例で示したように、*jat-* は「横たわる」という語彙的な意味ではなく、文法的な意味を表している (Zaxarova 1987: 279-280)。Zaxarova (1987: 280) は、補助動詞構造が一つのアクセントを持ち、補助動詞の頭音が落ち主動詞と融合する例として、次の (3) を挙げている。

(3) *ěč bol-bo-so* *čargïn kel-se* *bolo* *de-p,* *ayganïš* ***keyi-p*** ***at-a-t***
no be-NEG-COND PN come-COND would say-CVB.SEQ PN feel.sad-CVB.SEQ lie-NPST-3
「少なくともチャルガンは来るだろう、とアイガヌシュは悲しんでいる。」 (Zaxarova 1987: 279)

Zaxarova (1987) 以外のキルギス語の参照文法書 (Wurm 1949, Kara 2003) や、補助動詞 *jat-* を扱った研究 (アクマタリエワ 2014、スバゴジョエワ 2016 など) では *V-(I)p at-* の記述はない。ただし、発表者がこれまでに行った母語話者との調査では、*ište-p jat-a-t* [work-CVB.SEQ lie-NPST-3] が *ište-p at-a-t* と発音される例のみならず、*ište-**bat**-a-t* [iʃteβatát] と一つの強勢を取って縮約して一語として発音される例が観察されている。キルギス語の語は基本的に最終音節に強勢が落ちる (Kirchner 1998: 346)。*ište-**bat**-a-t* の最終音節には強勢が落ちるため、*ište-**bat**-a-t* は一語であるとみなせる。

本発表では、*-bat* を音韻論・形態論・意味論、さらに文法化の観点から記述する。特に文法化の観点から記述する際に、文法化のクライン (内容項目 > 文法的な語 > 接語 > 屈折接辞; Hopper and Traugott 2003: 7) において、語とも接語とも接辞とも判断できないことを示す。最終的に、音韻的観点 (*-bat* を含んだ一語が一つのアクセントを保つ点) と形態論的観点 (キルギス語の動詞形態法において動詞語根の直後にアスペクト接辞が付されうる点) から、*-bat* は接辞であると結論付ける。

3. 調査

母語話者三名 (1. ビシケク出身、1983 年生、2. チュ出身、2002 年生、3. ナリン出身、1977 年生) に下記の観点から聞き取り調査を行った。

音韻論的観点として「母音調和と唇音調和が起こるかどうか」という点、形態論的観点として「単独で現れるかどうか」「時制接辞がつくかどうか」という点、意味論的観点として「もとの語彙的な意味が残っているかどうか」という点を尋ねる。

3.1. 音韻論的観点「母音調和と唇音調和が起こるか」

キルギス語の接尾辞には、語根あるいは語幹の最終音節にある母音に合わせて、母音調和と唇音調和が起こる。下記に派生接辞の例として出名動詞 *-(A)r* (4) を挙げ、屈折接辞の例として過去 *-DI* (5) を挙げる[2]。出名動詞 *-(A)r* は、(4a) では *kök*「青い」中の円唇前舌母音 ö に合わせて *-ör* として実現して

[1] キルギス語では、*V-a/-y jat-*も用いられ、*jat-* の頭音が脱落することがある。アクマタリエワ (2014: 101) では、*V-a/-y jat-* が 4 つの異なる動詞語幹 (*kel-*「来る」、*bar-*「行く」、*kör-*「見る」、*al-*「連れる」) としか現れないことを指摘している。これに対して、*V-(I)p jat-* は 508 の異なる動詞語幹と現れるという (アクマタリエワ 2014: 66)。したがって、本稿では、より生産性の高い *V-(I)p jat-*を取り扱う。
[2] 本発表では母音調和による代表形を大文字で示す。

いる一方、(4b) では *jaš*「若い」中の後舌母音 a に合わせて *-ar* として実現している。過去 *-DI* は、(5a) では *kör-*「見る」中の円唇前舌母音 ö に合わせて *-dü* として実現している一方、(5b) では *oku-*「読む」中の円唇後舌母音 u に合わせて *-du* として実現している。

(4) a. *kög-ör-* b. *jaš-ar-*
blue-VBLZ- young-VBLZ-
「青くなる」 「若くなる」

(5) a. *kör-dü* b. *oku-du*
see-PAST read-PAST
「(彼は) 見た」 「(彼は) 読んだ」

接語 [3]にも母音調和と唇音調和が起こる。疑問 *=BI* は、(6a) では前接要素の *mugalim*「教師」中の非円唇前舌母音 i と調和して *=bi* として実現している一方、(6b) では前接要素の *okuuču* 中の円唇後舌母音 u と調和して*=bu* として実現している。

(6) a. *tetigil mugalim=**bi**?* b. *bul okuuču=**bu**?*
that teacher=Q this student=Q
「あちらは教師ですか。」 「こちらは学生ですか。」(アクマタリエワ・大﨑 2024: 30)

ただし、母音調和と唇音調和は *-bat* に起こらない。まず、母音調和と唇音調和が*-bat* に起こると仮定して、(7a) では *ište-*「働く」の音節末母音 e に合わせて *-bet* を、(7b) では *kör-*「見る」の音節末母音 ö に合わせて *-böt* を、(7c) では、*oku-*「読む」の音節末母音に合わせて *bot-* をそれぞれ付す。発表者が (7a) から (7c) を発音し、母語話者にそれぞれが言えるかどうかを尋ねた。しかし、どの母語話者も (7a) から (7c) のいずれも言えないと答えた。

(7) a. **ište-bet-* b. **kör-böt-* c. **oku-bot-*
work-PROG- see-PROG- read-PROG-

したがって、本節で扱った音韻論的観点からすると、*-bat* は接辞でも接語でもないと言える。

3.2. 形態論的観点「単独で現れるかどうか」「時制接辞がつくかどうか」

まず「単独で現れるかどうか」という観点について述べる。*-bat* 自体は単独で現れることはなく、必ず動詞語幹の直後に付される。したがって、形態論的には、語ではなく、接辞あるいは接語の特徴を持つと言える。

次に「時制接辞がつくかどうか」という観点について述べる。*-bat* のあとに非過去 *-A/-y* (8) あるいは過去 *-DI* (9) を付して、母語話者にそれぞれが言えるかどうか尋ねた。どの母語話者も、どちらも問題なく言えると答えた。

(8) *ište-bat-a-t*
work-PROG-NPST-3
「彼は働いている」

(9) *ište-bat-ti*
work-PROG-PAST
「彼は働いていた」

一般的な動詞語幹には非過去も過去も付きうるため、*-bat* は動詞的な性質も保っていると言える。

3.3. 意味論的観点「もとの動詞の語彙的意味が残っているかどうか」

-bat のもとの構造である *V-(I)p jat-* では動作の進行 (1) や持続 (2) が表されるが、*jat-*「横たわる」の語彙的意味が消失していないことがある。例えば、母語話者の一人によれば、(10) は *oku-p jat-a-t* は「寝

[3] 接語の認定基準として、強勢が落ちないことと、様々な種類のホストを取りうることが挙げられる。これらの特徴は接辞には見られない。

ながら読んでいる」という意味になるという。つまり、*oku-*「読む」という動作の姿勢が *jat-*「横たわる」で表されている。

(10) *ata-m* *divan-da* *gezit* ***oku-p*** ***jat-a-t***
father-1SG.POSS sofa-LOC newspaper read-CVB.SEQ lie-NPST-3
「私の父はソファで新聞を (横になって) 読んでいる。」

一方、*-bat* では *jat-*「横たわる」の語彙的意味は消失しており、いかなる姿勢も表さない。母語話者によれば、(11) では「読む」という動作の姿勢は読めないという。

(11) *ata-m* *divan-da* *gezit* ***oku-bat-a-t***
father-1SG.POSS sofa-LOC newspaper read-PROG-NPST-3
「私の父はソファで新聞を読んでいる。」

したがって、*V-(I)p jat-* は動作の姿勢を表すこともあるが、*-bat* は動作の姿勢の意味までも失ったと言える。

4. 文法化の観点からの記述

本節では、3 節の調査結果を踏まえ、*-bat* を文法化の観点から記述する。具体的には、拡張 (文脈による再解釈)・脱意味化 (意味の漂白)・脱範疇化 (もとの形式が持つ形態統語的な特徴が失われること)・音形縮約という 4 つの文法化のパラメーター (Kuteva, Heine, Hong, Long, Narrog and Rhee 2019: 3) が *-bat* に適用されるかという観点と、*-bat* が文法性のクライン (漸次変容; Hopper and Traugott 2003: 7) のどこに位置付けられるかという観点から記述を行う。

3 節での調査結果から、*bat-* には拡張・脱意味化・脱範疇化・音形縮約の全てが起こっていると言える。3.3 節の (10) と (11) から、*jat-*「横たわる」の持つ語彙的な意味が消失しアスペクト的意味しか表さないことから、*-bat* には脱意味化と拡張が起こっていると言える。3.2 節冒頭で述べたように、*-bat* 自体が単独で現れないことから、*-bat* には脱範疇化が起こっていると言える。加えて、*-(I)p jat-* から *-bat* への音形縮約が観察できる。以上より、*-bat* は*-(I)p jat-*よりもさらに文法化が進んだ形式であると言える。

Hopper and Traugott (2003: 7) は、下記の文法性のクラインを提示しており、通言語的な傾向としてこの順序が見られると述べている。

(12) 内容項目 (content item) > 文法的な語 (grammatical word) > 接語 (clitic) > 屈折接辞 (inflectional suffix)

キルギス語の *-bat* に注目すると、これがクラインのどこに位置付けられるかは不明である。*-bat* は、単独で現れないこと(3.2 節冒頭) から語ではないと言えるが、母音調和が起こらないこと (3.1 節の (7)) から接語でも接辞でもないと言える。しかし、次の二つの理由から、*-bat* は接尾辞であると結論付ける。一つは、*-bat* を含んだ語が一つのアクセントを保つという音韻的な理由である。2 節末では、*ište-**bat**-a-t* [iʃteβatát] の例を挙げた。キルギス語の語は基本的に最終音節に強勢が落ちるため (Kirchner 1998: 346)、*ište-bat-a-t* も一語であるとみなせる。したがって、*-bat* 自体は語ではないと言える。二つ目の理由としてはキルギス語の動詞形態法において動詞語根の直後にアスペクト接辞が付されうるという形態論的な理由が挙げられる。例えば、*čap-kïla-dï* [hit-ITER-PAST]「何回も叩いた」(江畑・アクマタリエワ 2022: 65) では、*čap-*「叩く」という動詞語根のあとに多数回を表す *-kïla* が続いている。*-bat* も動詞語根の直

後に現れるアスペクトを表す形式であるため、*-kīla* とパラディグマティックな関係にある、つまり同じ性質を持った形式であると言える。

5. ウズベク語と現代ウイグル語における継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式について

中央アジアで話されるが別語群に属する、現代ウイグル語とウズベク語タシケント方言 (ともに南東語群) にも、キルギス語と同様に、継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式が存在することが指摘されている (Johanson 2021: 647)。下記の図 1 に、赤枠で、タシケント (地図中では「タシュケント」と表記) と、キルギス語が主に話されているキルギス共和国 (地図中では「クルグズスタン」と表記) と、現代ウイグル語が話されている新疆ウイグル自治区を示す。図 1 から、ウズベク語タシケント方言、キルギス語、現代ウイグル語が話されている地域はお互いに地理的に近接していることがわかる。

図 1: 中央アジア概略図 (宇山編 2010: 2-3)

Ibrahim (1995: 47-48) によれば、現代ウイグル語では、*-(I)p yat-* [-CVB.SEQ lie-] が縮約して *-(I)wat-* となり、これは継続を表すという。

(13) *U* *Uyɣur* *kilassik* *ädäbiat-i-ni* *tatqiq* *qil-iš* *orn-i-da* ***išla-wat-i-du.***
3SG Uighur classic literature-3.POSS-ACC research do-VN place-3.POSS-LOC work-PROG-NPST-3
「彼はウイグル古典文学を研究するところで働いている。」(Ibrahim 1995: 47)

-(I)wat- は-wat-/-iwat-/-üwat-/-uwat- で実現される (Ibrahim 1995: 47-48)。この記述から、キルギス語の *-bat* と同様に、現代ウイグル語 *-(I)wat-* 中の *wat* も母音調和しないと言える。さらに、Ibrahim (1995: 47) は、*-(I)wat-* を接尾辞であるとみなしている。

Reshetov va Shoabdurahmonov (1987: 154) は、具体現在時制 (konkret hozirgi zamon) を表す例として、ウズベク語タシケント方言の例を挙げている (例文はキリル文字で表記されているため、現代ウズベク語のラテン文字正書法に近い形で転写する)。タシケント方言などの都市方言を基盤にしているウズベク語標準語に照らせば、*-vot* にも母音調和はないと想定される。

(14) a. *bor-**vom**=man*　　b. *bor-**vos**=san*　　c. *bor-**vot**=ti*

go-PROG=1SG　　go-PROG=2SG　　go-PROG=3

「私が行っている」　「君が行っている」　「彼が行っている」

(Reshetov and Shoabdurahmonov 1987: 154)

以上の記述から、継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式は地域特徴であることが示唆される。しかし、Kr. *-bat*, Ui. *-(I)wat-*, Tash. *-vot* が地域特徴であるとするには、それぞれの言語内のアスペクト形式や、チュルク諸語内の他の言語のアスペクトを調査し、これらの接辞がウズベキスタン東部、キルギス、新疆ウイグル自治区で話されるチュルク諸語にのみ見られる接尾辞であることを確認しなければならない。

6.　おわりに

本発表では、キルギス語の *V-(I)p jat-* [-CVB.SEQ lie-] が文法化した形式 *-bat* について、母語話者 3 名からの聞き取り調査をもとに、音韻論・形態論・意味論的観点から記述した。さらに、それらの記述をもとに文法化の観点から、特に文法化のパラメーターと文法性のクラインを用いて記述を行った。その結果、*-bat* は文法化の度合いが高い形式であることが明らかになったが、文法性のクライン上のどこに位置するのか不明であった。本発表では、*-bat* を含んだ一語が一つのアクセントを保つことと、動詞形態法において動詞語根の直後にアスペクト接辞が付されうることから、*-bat* は接尾辞であると結論付けた。さらに、近接する地域で話される、現代ウイグル語とウズベク語タシケント方言にも、キルギス語と同様に、継起副動詞＋「横たわる」由来のアスペクト形式が存在する (Kr. *-bat*, Ui. *-(I)wat-*, Tash. *-vot*) ため、これらの接尾辞が地域特徴である可能性を指摘した。

記述的な課題としては、否定について更なる調査が必要である。本発表では*-bat* を否定する際に否定の接尾辞がどこに付くのか、付く場所によって否定の作用域が変わりうるのかという問題については取り扱えなかった。また、Kr. *-bat*, Ui. *-(I)wat-*, Tash. *-vot* が地域特徴であると言うためには、それぞれの言語のアスペクト形式と、他チュルク諸語のアスペクト形式を調査しなければならない。

謝辞

本発表は、JSPS 科研費 JP22J01538, JP22KJ1443 の助成を受けたものである。

本発表は、キルギス語母語話者三名の方からの協力を得て成しえたものである。ここに彼女らに深い感謝の意を表する。無論、本発表での誤りは、協力者に一切の責はなく、発表者に帰するものである。また、調査場所を提供してくださったビシケク国立大学日本語講座、キルギス日本人材開発センターの先生方にも感謝申し上げる。

略号一覧

ACC	accusative	対格	NPST	non-past	非過去	Q	question	疑問
COND	condition	条件	PAST	past	過去	SEQ	sequential	継起
CVB	converb	副動詞	PN	personal name	人名	SG	singular	単数
ITER	iterative	反復	POSS	possession	所有	VBLZ	verbalizer	動詞化
LOC	locative	処格	PROG	progressive	進行	VN	verbal noun	動名詞
NEG	negative	否定						

参考文献

アクマタリエワジャクシルク (2014)『キルギス語の「持続」を表す補助動詞― jat-、tur-、otur-、jür を中心に ―』東京外国語大学博士学位論文.

アクマタリエワジャクシルク・大﨑紀子 (2024)『大学のキルギス語』東京: 東京外国語大学出版会.

江畑冬生・アクマタリエワジャクシルク (2022)『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』新潟: 新潟大学人文学部アジア連携研究センター.

Hopper, Paul J., and Elizabeth C. Traugott, (2003) *Grammaticalization. 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kara, David Somfai. (2003) *Kyrghyz*. Muenchen: Lincom Europa

Kirchner, Mark (1998) Kirghiz. Johanson, Lars and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*. 344-356. London, New York: Routledge.

Kuteva, Tania, Bernd Heine, Bo Hong, Haiping Long, Heiko Narrog and Seongha Rhee (2019) *World Lexicon of Grammaticalization. 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Reshetov, Viktor Vasilevich va Shonazar Shoabdurahmonov (1987) *O'zbek dialektlogiyasi.*［ウズベク語方言学］Toshkent: "O'qituvchi" nashiriyoti.

スバゴジョエワ, アセリ (2016)『進行アスペクトとテンスに関する日本語とキルギス語の対照研究』宇都宮大学博士学位論文.

宇山智彦編著 (2010)『エリア・スタディーズ 26 中央アジアを知るための 60 章【第二版】』東京: 明石書店.

Wurm, Stefan (1949) The (Kara-)Kirghiz Language. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*. 13(1): 97–120.

Zaxarova O. V. (1987) *Grammatika Kirgizskogo Literaturnogo Jazyka. Čast' 1. Fonetika i Morfologija.*［標準キルギス語文法　第 1 巻　音声学と形態論］Frunze: Izdatel'stvo "Ilim".